

第36回土門拳賞 梁丞佑(ヤン・スンウー)氏 写真集「新宿迷子」

街と人の「におい」表現

2016年に優れた作品を発表した写真家に贈られる第36回土門拳賞(主催・毎日新聞社、協賛・株式会社ニコソ、株式会社ニコソ、イメーシングジャパン)は、梁丞佑氏に決まった。受賞対象となったのは写真集

「新宿迷子」(Zen F oto Gallery)。90人あまりの推薦委員から推薦された12作品の中から、太田順一氏の写真集「遺された家―家族の記憶(海風社)、金山貴宏氏の写真集「While Leave」の5点が最終選考に残った。

梁氏の写真集は夜の新宿・歌舞伎町を「居場所」とする人々、またそこで起こったいさかきを1998年から14年まで捉えたスナップショットの集大成。モノクロームで写し取られた写真からは裸のままの人間の

姿が浮かび上がり、読者は街と人間の持つ強烈な「におい」に引き込まれる。日本有数の街での「ありさま」を記録し、社会に訴えた点が高く評価された。外国人の受賞者は初めて。

デジタルワックス インタビュー動画



新宿コマ劇場前の広場で寝ていた子ども(2003年)



小銭をくわえていたカラス(2005年)



騒ぎを起こしてパトカーに乗せられる男性(2001年)前日勇気がなく声をかけられなかった人たちに再会(1998年)



梁丞佑(ヤン・スンウー)
1966年韓国生まれ。96年来日。2000年日本写真芸術専門学校卒業。04年東京工芸大学芸術学部写真学科卒業。06年同大学院芸術学研究科修了。01年、05年上野彦馬賞(日本写真芸術学会奨励賞)受賞。写真集に「君はあっちがわ 僕はこっちがわ」(06年)、「君はあっちがわ 僕はこっちがわⅡ」(11年)、「青春吉日」(12年)など。



好きで続けた20年

●受賞のことは

何も分からず日本に来てから丸20年。初めてこの国で見た風景は、一見ソウルとあまり変わらない東京の「景色、だった。しかし、その街の中にはカルチャーショックがたまっていた。牛丼屋で黙々と一人でご飯を食べ「ごちそうさま」と言って帰っていく人々。肩をぶつけ合いながら、狭い飲み屋で楽しそうに過ごす人たち。規則正しく礼儀正しい。堅苦しいかと思

きや、自由。誰に何を言われる事も無く、一人自由に何かをできるのではないかと。この国に住みたいと思った。そして写真に出会った。映画でも良かったが、一人ではできないし、絵画の才能は皆無。妄想しながら、黙々とつくる写真は私にぴったりだった。学生の間は奨学金、賞金、バイト、学校に「住み着く」などで、学費や生活費を捻出できたが、その後は想像を超える貧乏生活が続いた。自分がやっている事が果たして何の意味があるのか時々不安になった。表面的なインパクトのせいで、写真の内側をちゃんと見てくれてい

ないのではないかと。この作風と外国人だということ、心の隅に「自分は無理だろう」という気持ちもあった。賞を頂けた事で、そのもやもやが全て吹き飛んだ。学生の頃からあこがれていた賞だった。きちんと評価してくれる国なんだと思った。これを機に日本で写真を撮っている外国人や、自分の作風に確信が持てないまま写真を撮っている方々の勇気に少しでもつながれば。好きという気持ちだけで続けてきた20年。自分の写真の向上にいつそ

土門拳賞とは

土門拳賞は、今日の写真文化の大きな流れのひとつをつくった土門拳の輝かしい業績をたたえ、毎日新聞社が創刊110年記念事業のひとつとして、1981年に制定。毎年、プロ・アマを問わず優れた成果を上げた写真家を表彰している。

かつてニューヨークにウィッシーという伝説の写真家があった。警察無線を傍受して犯罪現場に直行し、闇の中をフラッシュを閃かせ、血まみれのギャングを撮影した。梁丞佑氏は、東京・新宿の歓楽街・歌舞伎町の路上で段ボール生活をしながら写真を撮り続け一冊の写真集を上梓した。その「新宿迷子」の頁を捲ると現れてくるのは、いわゆる裏社会の刺青を帯びたヤクザの集団や、駆けつける警官隊のブレた映像、ホームレスや風俗産業で働く女性たち……一見するとスキヤンダラスな被写体を、荒々しい異界の光景を、この写真家は飽くまでも水平に、肯定も否定もしない視線で記録して行く。「全身小説家」という映画があったが、その意を借りていえば梁氏は全身が写真家である。手に持つカメラと自らの身体が瞬間的に反応して被写体に対して、写真は原初的なエネルギーに満ちている。そして特筆すべきは、後半に収められた、行き場の無い、多くの子供たちの写真である。出稼ぎの父親や夜の仕事を働く母親を待ちながら、深夜の町を彷徨している子供の姿が、胸を打つ。人が生きるとは何か。格差社会の現在、数々の問題を問うかけてくる。土門拳賞に相応しい労作である。

写真家 鈴木 龍一郎

選考委員 大石芳野(写真家)、鬼海弘雄(写真家)、鈴木龍一郎(写真家)、池澤夏樹(作家)、松木健(毎日新聞東京本社編集編成局長)(敬称略)